九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

質料の階層と「可能態」の概念 : アリストテレス『形而上学』H巻第四一五章およびΘ巻第七章の解釈

岩田, 圭一
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門

https://doi.org/10.15017/25106

出版情報：哲學年報. 71, pp.41-74, 2012-03-09. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

哲学年報　第七十一輯　抜刷
平成二十四年三月九日　発行

質料の階層と「可能態」の概念

―アリストテレス『形而上学』H巻第四―五章およびΘ巻第七章の解釈―

岩田圭一

質料の階層と「可能態」の概念

―アリストテレス『形而上学』H巻第四―五章およびΘ巻第七章の解釈―

岩田圭一

一　問題の所在

アリストテレスは『形而上学』中核諸巻において、感覚的事物の〈実体〉（οὐσία）が何であるかを探究し、その答えと考えられる本質ないし形相についてさまざまな観点から考察を行っている。感覚的事物の本質ないし形相はその事物の質料（ὕλη）の中に存在するとされるので、本質ないし形相がいかなるものであるかを明らかにする実体論のうちには、質料についての考察も含まれることになる。質料についての考察を含む主要な箇所としては、究極的な基体である質料が〈実体〉であるかどうかが検討されるZ巻第三章、感覚的事物の生成について論じられるZ巻第七―九章、事物の定義において質料への言及が必要かどうかについて論じられるZ巻第十―十一章、或る意味で実体と認められる質料についていくつかの観点から考察が行われるH巻第四―五章、ZH巻での考察を踏まえた上で「可能的にあるもの（τὸ δυνάμει ὄν）」としての質料について一定の見解が示されるΘ巻第七章を挙げることができるだろう。

アリストテレスの実体論における「質料」理解は、基本的には、或る質料に或る形相が加わって一つの感覚的

事物が作り上げられているという理解、すなわち、質料は結合体としての感覚的事物の構成要素であるという理解である。この場合、「質料」は感覚的事物に最も近い質料、いわゆる最近の質料を意味している。質料を結合体の構成要素として説明すること自体には、とくに問題はないように思われる。しかしアリストテレスはさらに、そのような構成要素としての質料を、「可能的にあるもの」、目の前にある机について言えば、「可能的に机であるもの」というように、生成論の観点から説明しようとする。「可能的に机であるもの」として捉えられる木材は、その机がそれから作られるところの基体であり、その机の生成に先立って存在するものであるように思われる。これに対してその机の構成要素としての木材は、すでにその机を作り上げている。アリストテレスが構成要素としての木材を説明するのに、生成の基体としての木材にまで遡って「可能的に机であるもの」と説明するのは、どのような考えに基づいているのか。構成要素としての質料を捉えるにあたって、あえて「可能態（δύναμις）」の概念を用いることには、どのような意味があるのか（1）。本稿では、こうした問いに一定の説明を与えるために、実体論の中でもとくに質料について詳しく論じられている箇所、すなわち、『形而上学』H巻第四―五章およびΘ巻第七章の前半を取り上げ、これらの箇所に見られる「質料」理解を明確にすることにしたい。

しかしそれに先立って、質料の捉え方に関する予備的な考察を行っておくことにしたい。その捉え方とは、質料を或る意味で実体として認める捉え方である。質料は実体であるかと問われれば、アリストテレスの学説を或る程度知っている者であれば、質料は実体を構成する要素であって実体ではないと答えることだろう。さらに、彼が‘οὐσία’という語の曖昧さを知っていれば、質料は本質ないし形相としての〈実体〉でもないと言うことだろう。〈実体〉はまさにアリストテレスの実体論において探究されるものであり、感覚的事物の存在にとっての第一の原因である（Z17, 1041b25-28）。感覚的事物の存在にとって質料は必要なものであるが、その存在にとっての第一の原因は質料ではなく本質ないし形相である。そうすると、質料は実体でも〈実体〉でもないのだから、質

料に‘οὐσία’という語を適用することは誤りであるように思われる。ところがアリストテレスはしばしば質料に‘οὐσία’という語を適用している（Z10, 1035a1-2, H1, 1042a26-27, 32, H2, 1042b9-10）[2]。あるいは、質料としての実体という意味で「質料的実体（ὑλικὴ οὐσία）」という言い回しを用いている（H4, 1044a15, Θ7, 1049a36）。アリストテレスが質料の或る意味でのοὐσία性を認めているのは、どのような意味においてであるか。まずはこの問いについて考えることから始めることにしたい。

二　質料の実体性

アリストテレスは『形而上学』Z巻においてその実体論を本格的に開始するにあたって、「それぞれのものの〈実体〉」と考えられる四つのものの一つとして基体を挙げている（Z3, 1028b35-36）。アリストテレスはそこで、何らかの意味において感覚的事物の基にあるものが、その事物にとっての〈実体〉であるだろう、という予測のもとで、基体を〈実体〉の候補として挙げていると考えられる。「基体」は一義的ではない――「質料」、「形態（形相）」、「それらからなるもの（質料と形相からなる結合体）」という三つの意味がある（Z3, 1029a2-3）――ので、どの意味の「基体」が感覚的事物の〈実体〉として認められるのかが問題になる。感覚的事物の物体性に着目すれば、感覚的事物の基にあってその物体性の根拠となっている質料が、その事物にとっての基体であることになる。質料がそのような基体であることは、感覚的事物から諸属性などさまざまな規定を取り去る思考実験において確認される（Z3, 1029a11-19）。しかし、基体である質料が〈実体〉であることになるかというと、そうならないことが、〈実体〉であるための基準――離在しうること（τὸ χωριστόν）と或るこれであること（τὸ τόδε τι）――を理由にして示される（Z3, 1029a27-28）。こうして、「質料」という意味での「基体」は〈実体〉を意味しないことが明らかになる[3]。

「基体」にはあと二つ、「形相」と「結合体」という用法があるが、アリストテレスはこれらについてその〈実体〉性を否定していない。ただし、結合体が基体とみなされる場合、それは「感覚的事物の基にあるもの」という意味での「基体」ではなく、「諸属性の基にあるもの」という意味での「基体」でなければならない。諸属性の基体は、感覚的事物の基にあるものではなく、感覚的事物そのものである。この「基体」の意味のずれは、‘οὐσία’という語の意味にも影響してくる。というのも諸属性の基体としての結合体は、〈実体〉ではなく実体であるからである。「それぞれのものの〈実体〉」すなわち感覚的事物の〈実体〉を求めて「基体」を挙げたにもかかわらず、「基体」の一用法として挙げられた結合体に関しては、もはや〈実体〉が問題にされていないように思われる。「基体」の三用法のうちで、〈実体〉である可能性が最も高いのは、やはり形相としての基体である。Z巻における実体論の展開の中で、形相が感覚的事物の本質という意味で〈実体〉であることが明らかにされるのであるが、「基体」の一用法として挙げられる「形相」についても、それが基体である限りにおいて感覚的事物の〈実体〉であることが認められていると考えられる。ただし、形相がどのような意味で基体であるかについてアリストテレスは説明しておらず、その意味では問題が残ると言わざるをえない(4)。ともかくアリストテレスは実体論を本格的に開始するにあたって、質料が〈実体〉であることを否定した上で、結合体が実体であることを確認するとともに、形相が〈実体〉であることを示唆していると言うことができるだろう。

Z巻における〈実体〉探究はさらに「本質」や「普遍」についての検討を経て、形相が感覚的事物の存在の原因であることを明らかにするところ(Z巻第十七章)まで進む。これに続いてH巻の論述が始まるのであるが、アリストテレスはH巻第一章において、それまでの実体論をまとめた上で、再度、‘οὐσία’としての「基体」の三用法に言及している(H1, 1042a26-31)。ここで注意しなければならないことは、Z巻第三章におけるのとは異なり、「基体」の三用法すべてが何らかの意味において‘οὐσία’であることが認められている点である。Z巻第三章

ではとくに質料の〈実体〉性を否定することが主眼となっていたが、H巻第一章ではそれは行われず、これ以降、質料は何らかの意味においてοὐσία であるものとして示されることになる。もしοὐσία の用法が、いわゆる「実体」と、ZH巻で探究される「〈実体〉」の二つであるとすれば、Z巻第三章で質料の〈実体〉性が否定されたことから考えて、質料はいわゆる実体として認められたことになるだろう。この場合の「実体」を個物と理解するとき、質料は個物として、つまりそれ自身が特定の形相と質料からなる結合体として存在することになるだろう。しかしZ巻までの実体論において説明される「質料」は個物ではなく、個物がそれから生成するところのもの、あるいは個物の構成要素を指している。アリストテレスはH巻に入って、それまでとは異なる「質料」理解、すなわち、「個物」としての「質料」という理解をするようになったと考えるべきなのだろうか(5)。

この問いに答えるには‘οὐσία’の用法を注意深く見ることが有益である。アリストテレスはH巻第一章の冒頭で、Z巻から続く探究において「οὐσίαι の原因、原理、構成要素」が探究されているとした上で、οὐσίαι を、一般に認められているοὐσίαι と、一部の人々が説くイデアや数学的諸対象に分ける(H1, 1042a4-12)。前者は「自然的なοὐσίαι」と呼ばれ、その例として、火、土、水、空気などの単純な諸物体、動植物とその諸部分などが挙げられている(H1, 1042a7-11)。同様の‘οὐσία’理解はZ巻にも二箇所見出される。一つは実体論が本格的に開始される直前のZ巻第二章、もう一つは「普遍」の問題が論じられる中で質料が可能的にあるものとして示されるZ巻第十六章である。Z巻第二章では、一般に‘οὐσία’という語がどのようなものに適用されるのかが示される際に、最も一般的な適用として、動植物やその諸部分、そして火、水、土などの自然的物体などが挙げられており(Z2, 1028b9-13)、またZ巻第十六章では、一般にοὐσία と考えられているものが可能態として存在することが示される際に、その例として、動物の諸部分と、土、火、空気が挙げられている(Z16, 1040b5-8)。アリストテレスの用法においては、動植物が「実体」と呼ばれ、動植物の諸部分や四元素などの単純な諸物体は「質料」

と呼ばれるべきものである。しかし一般的にはこれらはすべて‘οὐσία’と呼ばれることが示されるのである。このような用法を‘οὐσία’の一般的用法とみなすことにし、その訳語として、若干紛らわしいが、「実体」を用いることにしたい。つまり、アリストテレスの用法である、感覚的事物（個物）やその普遍を意味する「実体」の用法もあれば、感覚的事物やその質料的諸部分、単純な諸物体を広く意味する「実体」の用法もあると考えることにする。アリストテレスとしては「実体」ではなく「質料」と呼びたいところのものが、一般的には「実体」と呼ばれているということなのである。アリストテレスがH巻第一章以降で質料を「実体」と呼ぶのは、まさにこの一般的用法においてであると考えられる。このように理解すれば、「実体」と呼ばれる質料を、個物と同じ存在論的身分をもっているものとして、すなわち、通常理解される「質料」とは異なる仕方で存在する質料として理解する必要はなくなるだろう。われわれは質料の実体性をこのように理解することによって、H巻以降では「個物」としての「質料」という理解が行われているのだという解釈をする必要はなくなるだろう。

ところで、H巻に入ってからもアリストテレスの主な関心は、〈実体〉としての本質ないし形相がいかなるものであるかを説明することにある。それは、H巻第二章の冒頭にもあるように、質料としての実体については一般に認められており、感覚的事物の現実態としての〈実体〉がいかなるものであるかを言うことが課題として残っている（H2, 1042b9-11）、という説明からも明らかである。しかしアリストテレスはこのように言いながらも、現実態としての〈実体〉について説明した後、一般に認められているという質料としての実体について詳しい説明を行っている。以下で、H巻第四―五章における質料についての考察を取り上げ、アリストテレスの「質料」理解を明確にしていくことにしよう。

三　質料の階層と「第一質料」の問題

すでに述べたように、アリストテレスの実体論における基本的な「質料」理解として、感覚的事物に最も近い質料、いわゆる最近の質料という理解がある。これは、感覚的事物とその質料との関係を示している。しかし最近の質料という考えは、感覚的事物とその質料との間にのみ見出されるのではない。このことは、質料について論じられるH巻第四章において説明される。アリストテレスはH巻第四章の冒頭で次のように説明している。

> 質料的実体（ὑλικὴ οὐσία）については次のことを忘れてはならない。すなわち、すべてのものが同じ第一のものから、あるいは第一のものとしてのいくつかの同じものから〔生成する〕としても、そして諸々の生成するものには同じ質料が原理（ἀρχή）としてあるとしても、それでもやはりそれぞれのものに固有の（οἰκεῖα）或る〔質料〕が存在する。例えば粘液に〔固有の質料は〕諸々の甘いもの、あるいは諸々の脂っぽいものであるが、胆汁に〔固有の質料は〕諸々の苦いもの、あるいは他の何らかのものである。しかしおそらくそれら〔諸々の甘いもの、脂っぽいもの、苦いものなど〕は同じ〔第一の〕ものから〔生成している〕だろう。（H4, 1044a15-20）

この章では質料そのものが考察の対象になっているのであるが、この引用の最初にあるように、アリストテレスはこの対象を、「実体」の一般的用法において「質料的実体」と呼んでいる。前節で明らかにしたとおり、「質料的実体」と言われていても、個物が意味されているわけではなく、いわゆる質料が意味されている(6)。ここでは、質料をもつ感覚的事物は問題にされず、質料そのものが取り上げられ、その例として、粘液と胆汁、そしてそれらの下位の質料である諸々の甘いもの、脂っぽいもの、苦いものなどが挙げられている。粘液という質料

に関して言うと、この引用の後の論述などから、脂っぽいものは甘いものから生成する、言い換えれば、甘いものは脂っぽいものの下位の質料であることがわかるので（7）、粘液の下位にある質料は順に、脂っぽいもの、甘いもの、そして第一のもの、あるいはいくつかの第一のものであることになる。この質料の階層によれば、粘液に固有の質料、すなわち、粘液にとっての最近の質料は、脂っぽいものであることになる。右の引用では、粘液にとっての最近の質料は「諸々の甘いもの、あるいは諸々の脂っぽいもの」と言われているが、これは、右の引用においては、脂っぽいものと甘いものとの階層が考慮に入れられていないからにすぎない。

ところで、「粘液、脂っぽいもの、甘いもの、第一のもの、あるいはいくつかの第一のもの」という階層において最上位にある粘液もまた質料であるのだから、粘液を最近の質料とする上位のものは何なのかという問いが出されるかもしれない。粘液については動物学関係の著作――『動物誌』や『動物発生論』など――を参照する必要がある。それによると、粘液は、動物が体内に摂り込んだ有用な栄養分から生じる過剰物（περίττωμα）である（8）。このような過剰物は、肉や骨など（等質部分）が器官（異質部分）を構成するように何かを構成するようなものではない。つまり、粘液から、より上位のものが生成することはないと考えられる。そうすると、粘液は質料ではなく個別的実体であることになるのだろうか。しかし右の引用の最初にあるように、粘液は質料的実体であり、質料である。アリストテレスは『動物発生論』第一巻第十八章の一節で、「われわれが身体のうちに見出すすべてのもの」として、自然に従った部分（等質部分と異質部分）、自然に反した部分（腫物）、過剰物、排泄物、栄養物を挙げている（*GA* I, 18, 724b23-26）。これを見ると、アリストテレスは過剰物を、身体を構成する質料とは見ていないが、身体のうちにある或る意味での要素とみなしていることがわかる。身体は質料とみなされるのだから、身体のうちにある過剰物も質料であると言ってよいのではないだろうか。このように考えて、過剰物としての粘液は、骨や肉と同じように身体を構成しているわけではないが、動物の身体のうちにある限り

において動物の質料であると考えることにしたい。ともかく、右の引用でアリストテレスが主張していることはっきりしている。すなわち、粘液や胆汁のような一定のレベルの質料には最近の質料があるということである(9)。

このように右の引用における主張ははっきりしているのであるが、その引用の中には或る解釈上の問題が含まれている。それは、質料の階層における最下のものをどのように理解するかという問題である。これはいわゆる「第一質料」の問題にほかならない。粘液にしても胆汁にしても、生成するものはすべて、「同じ第一のものから、あるいは第一のものとしてのいくつかの同じものから」生成するとされる。ここでアリストテレスは質料の階層における最下のものとして、いわゆる第一質料――あらゆる規定性の基にあってそれ自体はいかなる規定ももっていないもの――を挙げているように思われるかもしれない。しかしそうであるとすれば、「同じ第一のものから」とだけ述べるべきで、「あるいは第一のものとしてのいくつかの同じものから」と付け加えてはならないだろう(10)。というのも、いわゆる第一質料がいくつかのものであるというのは、意味が不明だからである。いくつかと言えるようなものは、相互に差異をもっているから、いくつかのものとして捉えられる。第一質料はそれ自体ではいかなる規定ももっていないので、いくつかのものとしては捉えられないだろう。このように考えると、右の引用で第一のもの、あるいはいくつかの第一のものとされる最下層のものは、いわゆる第一質料ではないことになるだろう。前節でも見たように、アリストテレスは一般的な意味での「実体」として、火、土、水、空気などの単純な諸物体を認めている。実際のところ、右の引用で第一のもの、あるいはいくつかの第一のものとされるのは、これら単純な諸物体のことであると考えるのが穏当なところだろう。第一のものが一つであるとすれば、単純な諸物体のどれか一つがそうなのであり、第一のものが複数あるとすれば、単純な諸物体のいくつか、あるいはそのすべてがそうなのだと考えられる。

いわゆる第一質料については、その存在が問題にされる文脈に注意することが必要である。アリストテレスの実体論の中では、『形而上学』Z巻第三章において、感覚的事物から諸属性などさまざまな規定を取り去る思考実験が行われ、最後に、それ自体としてはいかなる規定ももっていない何か、すなわちいわゆる第一質料があることが示唆されている。しかしこれは思考実験であって、思考の上で第一質料のようなものが見出されうるということにすぎない。この意味では第一質料は思考の産物であるように思われる。いわゆる第一質料の存在が示されていると考えられる最も注目するべき箇所は、質料そのものが問題にされる『生成消滅論』の第二巻第一章の一節である。そこでアリストテレスは確かに、「諸々の第一のもの」としての単純な諸物体が第一質料と対立的な諸性質（熱、冷、乾、湿）からなっているように説明している（*GC* II, 1, 329a29-35）。しかし『生成消滅論』第二巻第四章において、単純な諸物体が相互に変化し合うことが示されていることからもわかるように、アリストテレスは、何とも規定されない第一質料から火や水などが生成すると考えているのではなく、熱や冷といった対立的性質の担い手として第一質料が必要であると考えている(11)。アリストテレスはまた、第一質料は対立的性質から離れてありえない(*GC* II, 1, 329a30-31)、すなわち、何らかの対立的性質を担った限りでしか存在しないと考えている。これは、質料を分割していった最終のものはあくまでも単純な諸物体であり、第一質料ではないことを意味していると理解されうる。第一質料は単純な諸物体がもつ対立的性質の担い手としてのみ必要とされるのだと考えられる。第一質料について明確な見解をもつには、『生成消滅論』の当該箇所の詳細な検討が必要であり、これは本稿の範囲を超える仕事になるので、これについてはここではこれ以上問題にしないことにする。ともかく、本節で取り上げた引用箇所における「同じ第一のもの」、あるいは「第一のものとしてのいくつかの同じもの」は、『生成消滅論』の関連箇所でも「諸々の第一のもの」と言われていた、火や水などの単純な諸物体を指していると考えるのが、解釈として自然であるだろう。

H巻第四章ではさらに、最近の質料とこれからなる産物との関係について、起動因の役割とともに説明が行われ（H4, 1044a25-32）、その後、原因について考察が行われている。前者の説明についてはとくに問題はないように思われるし、また後者については「質料」の問題に関する考察とは異なっているので、これらについては省略することにし、次に、H巻第五章において取り上げられる、対立的性質と質料との関係、そして質料を基体とする円環の構造についての説明を見ることにしたい。

四　対立的性質と質料との関係

アリストテレスは「生成」の問題を考える際、自身のカテゴリー学説に基づいて、実体的生成と属性的生成という二種類の生成を区別する。これは、『自然学』第一巻第七章に示されている考えであり、生成に関する基本的な考え方であると言える。実体的生成は個別的実体が一定の質料から生成することであり、属性的生成は個別的実体の属性が変化することである。例えばソクラテスが生まれることは実体的生成であり、ソクラテスの肌の色が白くなることは属性的生成である。これら二種類の生成が区別される一つの特徴として、それらの生成の基体の違いを挙げることができる。すなわち、実体的生成の基体が質料であるのに対して、属性的生成の基体は実体である。二種類の生成を区別する際、この違いは重要なものである。しかしながらアリストテレスはしばしば、属性的生成の基体として質料を挙げる。例えば『形而上学』Z巻第七章において技術的な生成（制作）の例として挙げられる治療――医者が病気のものを健康なものにすること――がそうである。健康と病気は身体の状態であり属性であるので、治療は、身体という質料を基体とする属性的生成として説明される。アリストテレスがこのような属性的生成を認めていたことは、『生成消滅論』第一巻第四章のはじめで、身体が健康になったり病気になったりすることを性質的変化（ἀλλοίωσις）の一例として挙げていることからも明らかである（*GC* I, 4,

319b10-13)。また同じ第一巻第四章のおわりで、質料は厳密な意味においては生成消滅――実体的な意味での――の基体であるが、或る意味では他の（性質的な）変化の基体であると言われていることも（*GC* I, 4, 320a2-5)、質料を基体とする属性的生成が認められていたことを示している。H巻第五章では、まずこのような属性的生成が取り上げられ、対立的性質――健康と病気など――とその基体（質料）との関係が問題にされる。本節では、この問題について考察することによって、「質料」についての理解を深めることにしたい。

アリストテレスはH巻第五章において、「それぞれのもの(12)の質料（ἡ ὕλη ἑκάστου）が諸々の反対のもの〔対立的性質〕に対して（πρὸς τἀναντία）どのような関係にあるか」ということを第一のアポリアとして立てる（H5, 1044b29-30）(13)。そしてこのアポリアの説明として、「可能態」の概念を用いて、「もし身体が可能的に（δυνάμει）健康なものであり、そして病気が健康の反対であるなら、それ〔身体〕は可能的に両方のものであるのか」、「そして水は可能的に酒であり酢であるのか」（H5, 1044b30-32）と述べる。つまり、一つの例としては、身体という質料が健康と病気という対立的性質に対してどのように関係しているかが問われ、もう一つの例として、水という質料が酒と酢という対立的性質に対してどのように関係しているかが問われている。これらの例は属性的生成の例であるので、質料は、可能的に何らかの属性をもっているものとして説明される。例えば身体は可能的に健康であると言われる。ここでアリストテレスは、対立的性質のそれぞれが、その基体としての質料に対して同じ仕方で「可能的にしかじかである」と言われるのかどうかを問題にしている。つまり、身体は可能的に健康であると言われるが、身体は可能的に病気であるとも言われるのかと問うている。この問いに対しては、身体は健康にも病気にもなるのだから、当然、可能的に健康であるとも、可能的に病気であるとも言える、と難なく答えられるように思われる。アリストテレスは確かに、このように簡単に答えられる問いをまず立てているのであるが、問題にしたいことは実はその問いそのものではないように思われる。アリストテレスはむしろ、そ

の問いに続けて、同じく問いの形で――しかし実際はアリストテレス自身の主張と理解できる――述べられていることのほうを問題にしていると考えられる。それは以下のとおりである。

> あるいはそれ〔身体ないし水〕は、〔それの〕状態によって（καθ' ἕξιν）、そして形相によって（κατὰ τὸ εἶδος）、一方のもの〔健康ないし酒〕の〔質料〕であり、〔その状態や形相の〕欠如によって、そして〔その〕本性に反する〔その状態や形相の〕消滅によって（κατὰ στέρησιν καὶ φθορὰν τὴν παρὰ φύσιν）、他方のもの〔病気ないし酢〕の〔質料〕であるのか。（H5, 1044b32-34）

身体が健康と病気に対してどのように関係しているかということで言えば、身体は可能的に健康であるとも病気であるとも言えるのであるが、身体が健康になる場合の原因と、身体が病気になる場合の原因は、前者が形相、後者が欠如であるという点で異なっている。つまり、アリストテレスは、健康になることと病気になることとは「可能的に」と言える点では同じであるが、それぞれの生成が成り立つ原因は異なるということを語っているのである。これを見ると、アリストテレスがこの章で問題にしたいことが見えてくるように思われる。しかし、問題にされていることをその例によって理解しようとするとき、必ずしも容易には理解できないという困難がある。右の引用において言われていることをもう少し詳しく見てみることにしよう。

アリストテレスが挙げる「対立的性質―質料」の例は、「健康／病気―身体」と「酒／酢―水」である。健康と病気については身体の状態であり属性であるので、身体を基体とする属性的生成が問題になっていることは明らかであるが、酒と酢についてはそのように言えるかどうかが問題であるように思われる。というのも酒と酢は水を質料とする実体であるように思われるからである。もしそうだとすれば、酒と酢の生成は実体的生成であり、

水という質料に〈酒〉という形相が加わるか〈酢〉という形相が加わるかによって、酒と酢のどちらが生成するかが決まってくることになるだろう。しかしアリストテレスは酒と酢を「反対のもの」として、健康と病気と同様なものとして挙げており、その限りでは、いわば水の健康な状態としての酒と、水の病気の状態としての酢とが対立的性質として問題にされていると考えるべきであるように思われる。同じ章の後の論述を見ても、健康なものが病気になるのと同じように、酒が酢になると説明されており、対立的性質の一方から他方への変化が問題にされている。もし酒の実体的生成、酢の実体的生成が問題にされているのだとしたら、酒から酢への変化にこだわる必要はなくなるだろう。なぜなら、水に〈酒〉が加われば酒が生成し、水に〈酢〉が加われば酢が生成するというように、それぞれの実体的生成は独立に説明されうるからである。この章では、やはり質料が属性的生成の基体であることが主眼になっているので、酒と酢は別々の実体としてではなく、対立的性質として理解されていると解することにしたい。

このように理解した上で、右の引用における説明をその例に即して見ると、身体が健康という属性にとっての質料であるのはその状態ないし形相によってであり、身体が病気という属性にとっての質料であるのはその状態や形相の欠如ないし消滅によってである。また同様に、水が酒にとっての質料であるのはその状態ないし形相によってであり、水が酢にとっての質料であるのはその状態や形相の欠如ないし消滅によってである。この説明では、質料、対立的性質（属性）に加えて、状態ないし形相、そしてその欠如ないし消滅が挙げられている。一見、状態ないし形相は対立的性質のうちの肯定的なものを指しているように思われる。というのも、例えばソクラテスが健康になるという属性的生成において、ソクラテスは基体、健康は属性的形相であるとしばしば理解されるからである。確かに属性は形相的な身分のものとみなされうるが、この引用における「状態ないし形相」をそのように理解してよいかどうかは問題である。ここでアリストテレスが問題にしている基体は質料である。アリ

ストテレスはここで、質料を基体とする属性的生成を説明するのに、質料に属性的形相が加わることによってであると語っているのだろうか。この問いに対しては否と答えるべきである。質料を基体とする属性的生成を説明するとき、アリストテレスの関心は、質料のうちに具体的にどのような変化が生じて特定の属性、例えば健康を獲得することになるのかということに向いている。実際、Z巻第七章において、身体が健康になるという属性的生成の説明に際して、身体にマッサージが施され、熱が生じ、さらに熱の均衡が生じて健康になる、というように、身体のうちの具体的な変化が語られている(14)。これを踏まえると、身体が健康にとっての質料であるのはその状態ないし形相によってであると言われるとき、その状態ないし形相は身体のうちに生じている或る状態すなわち熱の均衡であると言うことができるだろう(15)。或る人の身体が健康になるとき、身体がこの属性的生成の質料であるのは、その身体のうちに熱の均衡が生じるからなのである。熱の均衡がその身体のうちに生じなければその身体は健康にはならない。アリストテレスはこのようなことを考えて、「状態ないし形相」に言及したのだと考えられる。欠如ないし消滅について言えば、熱の均衡がなくなることによってその身体は病気になる。熱の均衡がなくなるところのものは身体であり、その均衡がなくなる身体は病気にとっての質料にほかならない。それから酒と酢の場合も、アリストテレスは、身体における熱の均衡のような状態が、水のうちに生じる、あるいはなくなる、と考えていたのだと思われる。

こうして、対立的性質とその質料との関係について一定の理解が得られたと思うが、そこで用いられている「可能態」概念について一言しておきたい。アリストテレスの実体論において質料に「可能態」が適用される場合、結合体の質料に関して形相との関係において適用されるのが普通である。先に挙げた例で言うと、机の質料としての木材は「可能的に机であるもの」として――〈机〉という形相の名前を使って――説明される。これに対して、H巻第五章において質料に適用される「可能態」は、属性的生成の基体であることを示すものであり、

属性との関係で適用される。身体が可能的に健康であるとか病気であるというのは、身体が、健康あるいは病気になるという属性的生成の基体であることを示している。ここではあくまでも「生成」の問題が語られているのであり、生成したものが身体と健康からなる結合体であるとか、そのような結合体の構成要素としての身体が可能的にあるものであるというような主張は行われていない。「可能的にあるもの」としての質料は実体論における基本的な「質料」理解であるが、質料そのものを考察の対象としてこれを属性的生成の基体と捉える文脈において、実体論における基本的な「質料」理解とは異なる仕方での「可能的にあるもの」としての質料という理解があることも、忘れてはならないだろう。

五　質料を基体とする円環の構造

さて、アリストテレスは『形而上学』H巻第五章において、前節で見た第一のアポリアに続いて第二のアポリアを提示している。そのアポリアとは、「何ゆえ（διὰ τί）酒は酢の質料でもなく、可能的に酢であるのでもないのか（しかし酢はそれ〔酒〕から生成する）、そして〔何ゆえ〕生きている者（ὁ ζῶν）は可能的に死体であるのでもないのか」（H5, 1044b34-36）、というものである。第一のアポリアでは、酒と酢は健康と病気と同じく対立的性質として扱われていたが、この第二のアポリアでは、質料なのではないかと言われているもの――酢の質料ではないかと言われている酒――は対立的性質ではなく、すでに存在する産物として理解されるべきだろう。というのもこの場合、すでに存在する酒――水に一定の状態ないし形相が加わったもの――から酢になるのであって、属性としての酒から酢になるのではないからである[16]。この意味のずれに注意した上で、第二のアポリアを見ると、ここでは、どのようなものが質料とみなされるのかが問題にされていることがわかる。第一のアポリアでは、質料の例として身体と水が挙げられており、これらが質料であることについてはとくに問題は提示

されなかった。今度は、何ゆえ酒は酢の質料ではないのか、そして同じことであるが、何ゆえ酒は可能的に酢であるのではないのか、と問われている。また新しい例として、何ゆえ生きている者は可能的に死体であるのではないのか、というのが挙げられている。これらの問いに対するアリストテレスの答えははっきりしている。すなわち、酢の質料であり、可能的に酢であるのは、酒ではなく、質料としての水であり、また、可能的に死体であるのは、生きている者ではなく、質料としての身体である（H5, 1045a1-2）[17]。

ここで注目するべきことは、「可能態」の用法が制限的であることである。前節のおわりで、質料が属性的生成における属性との関係で「可能的にあるもの」とみなされる用法に言及したが、ここでもその用法が用いられていると考えられる。ここではとくに、「可能態」の用法が「可能性」よりも狭く制限的であることが示されていることが注目に値する。ここで、酒が酢になることは事実とみなされているのだから、普通に理解される「可能性」の用法によるなら、酒は可能的に酢であると言えるだろう。しかしこの箇所から読み取ることができるように、アリストテレスは、「可能態」が当該の生成の基体――この場合は質料――に適用されるべきだと考える。酒が酢になる場合の基体は酒ではなく水という質料であるので、この場合、「可能態」が適用されるのは水でなければならないことになる。生きている者が死体になるのも、生きている者の身体における一定の状態ないし形相が消滅することによってであるので、死体の質料は身体であるだろう。したがって、可能的に死体であるものは生きている者ではなく身体であることになる。

このように第二のアポリアでは、対立的性質のうちの一方をもつものが他方の性質のものに変化する属性的生成あるいは腐敗[18]が取り上げられ、その場合の基体が何であるかが問題にされている。そしてその答えとして、対立的性質のうちの一方をもつものそのものではなく、そのものの質料が挙げられる。アリストテレスはここからさらに、質料を基体とするこのような属性的生成が円環的であることを明らかにする。先ほど、酒が酢になり、

生きている者が死体になることが、質料における一定の状態ないし形相の欠如ないし消滅によって起こることに触れたが、アリストテレスは逆の生成、すなわち、酢から酒になること、そして死体から生きている者になることについても語っている。その際にアリストテレスが注意するのは、酢が直接的に酒になるとか、死体が直接的に生きている者になるのではなく、酢も死体も質料に戻ってから酒や生きている者になるということである。それは以下のように示されている。

> こうして、そのように互いへと変化する限りのものは〔まず〕その質料に戻らなければならない[19]。例えばもし動物〔生きている者〕が死体から生成するとしたら、それ〔死体〕はまずその質料に〔戻り〕、それからそのように〔その質料から〕動物が〔生成する〕。そして酢は水に戻り、それからそのように〔水から〕酒が〔生成する〕。(H5, 1045a3-6)

水はそのうちに一定の状態ないし形相が生じることによって酒になり、酒はその状態ないし形相がなくなることによって酢になる。さらに酢はどうにかして――これについては説明されていない――水に戻り、この水のうちに再び一定の状態ないし形相が生じることによってこの水は酒になる。この例が円環的であることは理解できなくはないが、死体から生きている者が生じると言われることについては理解することが難しい。そもそもこの例は第一のアポリアでは挙げられていなかった。第一のアポリアにおける二つの例と同じように理解するなら、この新しい例における質料は身体、対立的性質は生きている者と死体となるだろう。しかし生きている者と死体については、酒と酢の場合に感じた疑問、すなわち、対立的性質ではなく実体ではないのかという疑問が提出されうる。おそらく本来なら、生きていることと死んでいることを対立的性質として挙げるべきであるように

思われるが、アリストテレスはそれらの性質をもつものを表す表現を用いてしまったということではないだろうか。そのように考えて、この例では、身体という質料、生きていることと死んでいることという対立的性質が問題にされていると解することにする。そうすると、この場合、質料としての身体はそのうちに一定の状態ないし形相が生じることによって生きている者になり(20)、生きている者はその状態ないし形相がなくなることによって死体になり、さらに、死体はどうにかして質料としての身体に戻り、この身体のうちに再び一定の状態ないし形相が生じることによってこの身体は生きている者になるのだろう。しかしこの説明はいかがわしく聞こえる。まず、死体が身体に戻るということの意味がよくわからない。ここでの一定の状態ないし形相が生命活動のための能力なのだとすると、これがなくなって生じた死体は質料としての身体そのものであるのではないか。それから、仮に死体が質料としての身体に戻ったとしても、その身体に再び一定の状態ないし形相が生じることは可能なのか。生物は人工物とは異なり、生まれるものなので、そのような円環はありえないように思われる。しかし何とかその例を理解しようと試みるとすれば、一体の動物が生じ、死に、生き返るというように考えるのをやめるべきだろう。そのように考える代わりに、一体の動物が生じ、死に、それが身体――あるいはむしろ肉のかたまり――になり、そこから、虫のような生物がどうにかして生じるということを考えるのがよいだろう(21)。これは一体の動物が再生するという意味での円環ではなく、或る生物から再び別の生物が生じるという意味での生命の円環である。酒の場合と動物の場合とでこのような違いはあるが、いずれも、円環を支える基体として質料が存在していることを示している点では同じであると言える(22)。

ところで、アリストテレスはなぜこのような質料の役割に触れたのだろうか。この問いに答えるには、『生成消滅論』第一巻第三章において示されている問題意識を思い起こす必要があるだろう。アリストテレスはそこで以下のような趣旨のことを言っている。すなわち、もし消滅というものがまったくあらぬもの（無）への消滅で

あり、世界にあるものが消滅し続けてきたのだとしたら、この世界にあるもの――その質料は有限である――はなぜ、使い果たされ、なくなってしまっていないのだろうか、と(*GC* I, 3, 318a14-19)。アリストテレスは、世界は生成消滅する諸事物で成り立っているがその生成消滅は永続すると考えていたのであり、それを支えるものとして、まったくの無になることのない質料が存在すると信じていたのだと考えられる。H巻第五章の第二のアポリアにおける円環に関する主張は、このような問題意識から理解することができるだろう。ただ、この主張において、いわゆる実体的生成が問題にされていないことに問題を見出す者もいるかもしれない。なるほど、生成消滅を問題にするとき、実体が生成し消滅することを抜きにして説明するのは不十分であるように思われる。しかしアリストテレスがこの主張において問題にしているのは、或る個別的実体が生成したり消滅したりすることではなく、生成消滅する諸事物にとっての質料が枯渇することなく永続的に存在するということである。つまり、この主張は、個別的実体の生成消滅を問題にするよりも広い視野から行われているのである。例として酒と酢、生きている者と死体が挙げられており、これらは一定の質料を基体とする属性的生成として理解されているが、酒や生きている者は実体であるとも言える。酒造りの技術をもつ者が酒を造るという観点から見れば、それは酒の実体的生成とも言えるはずであるし、一体の動物が親から生まれるという観点から見れば、それは一体の動物の実体的生成であるだろう。しかしここでのアリストテレスの関心はより広い視野からのものである。つまり、諸事物の生成消滅を、質料を基体とする属性的生成として、腐敗や消滅の過程も含む円環の構造として理解し、これによって、生成消滅する諸事物が無に帰するのではないことを示しているのである。

六　質料の階層と「可能態」の厳密な用法

さて、『形而上学』H巻第四章において、質料には階層があること、そして最近の質料が存在することが、質

料そのものを問題にする形で示されたが、この見解はΘ巻第七章において、実体を問題にする文脈に持ち込まれることになる。アリストテレスはそこで、個別的実体の質料がどのようなものであり、それがどのように捉えられるかを問題にするのであるが、これらの問題の考察に際してH巻第四章で示された見解が役立てられる。Θ巻第七章は、質料の階層を前提として「可能態」の厳密な用法が明らかにされる部分（Θ7, 1048b37-1049a18）と、個別的実体を構成する質料のあり方が問題にされる部分（Θ7, 1049a18-b2）からなる。後者の部分では、実体の属性と実体の構成質料とが類比的に捉えられ、それらの特徴として無規定性が挙げられており、存在論的な観点から見て重要であるが、この問題は本稿の範囲を超えるものなので、これについては別の機会に論じることにしたい。前者の部分について本節で取り上げ、考察を行うことにする。

アリストテレスはΘ巻第七章の冒頭で、「それぞれのものがいつ可能的に（δυνάμει）あり、いつそうでないのかを規定しなければならない」（Θ7, 1048b37-1049a1）と述べ、続く論述において具体的な例を挙げている。まず挙げられるのが、可能的に人間であるという例である。アリストテレスは次のように問題を提示している。「例えば土は可能的に人間であるか。あるいはそうではなくて、むしろそれ〔土〕がすでに精子になったときに〔それは可能的に人間である〕だろうが、もしかするとそのときもそうではない〔可能的に人間であるのではない〕のだろうか」（Θ7, 1049a1-3）。ここでの理解によれば、人間は究極的には、単純な物体である土から生じる。しかし土から直接的に人間になるのではなく、土はまず精子になる。そして精子から直接的に人間になるのかと言うと、そうではないことが暗に示されている。後の論述を見ると、精子は胎児になり、胎児が人間になることが示唆されている（Θ7, 1049a14-16）。ただ、アリストテレスの考えでは精子は起動因とみなされうるので（H4, 1044a35）、「土→精子→胎児」という質料の階層に精子が挙げられることは問題であるように思われるが、ここでは当時の学問的知識の影響もあって精子を質料とみなしているようである[23]。ともかく、この例からわかる

ように、アリストテレスは、「それぞれのものがいつ可能的にあるか」という問題を、どの段階の質料が可能的に一定の種のものであると言えるかという問題として解決しようとしている。

この問題の解決にあたって、アリストテレスは技術的な生成（制作）の場合を取り上げ、生成について一定の説明を与えている。その説明は以下のとおりである。

> 可能的にあるものから思考によって現実的に生成するものの規定（ὅρος δὲ τοῦ μὲν ἀπὸ διανοίας ἐντελεχείᾳ γιγνομένου ἐκ τοῦ δυνάμει ὄντος）は、「それ〔生成するもの〕が意図され（βουληθέντος）、外部にある何ものも〔その生成を〕妨げないことによって、それが生成するとき」、そして「健康にされるもののほうにおいては、そのもののうちにある何ものも〔その生成を〕妨げないとき」、というものである。（Θ7, 1049a5-8）

この説明の途中で言及されている「健康にされるもの」から考えて、ここでアリストテレスは身体を健康にするという技術的な生成すなわち治療を具体例として考えているようである。ここで説明されるのは、「可能的にあるものから思考によって現実的に生成するもの」である。治療の場合、可能的に健康である身体から医術によって現実的に生成するものは、現実的に健康である身体である。文字通りにとれば、ここで説明されるのは、現実的に健康である身体、すなわち生成の産物であることになる。しかしその説明の内容を見ると、生成の産物がいかなるものであるかということは説明されておらず、しかじかのときという一定の条件が説明の内容となっている。ここから、「可能的にあるものから思考によって現実的に生成するものの規定」が、現実的に生成するもの（生成の産物）の本質規定ではないことがわかる。ここで言われる「規定」は、現実的に生成するもの（生

成の産物）の条件を意味していると考えられる。しかし、生成の産物の条件と解したのでは意味がはっきりしない。その条件の内容から判断して、アリストテレスが問題にしたいのは、生成の産物の条件というよりはむしろ、可能的にあるものから生成の産物が現実的に生成することの条件であると解するべきである。表現としては、「可能的にあるものから思考によって現実的に生成するものの規定」となっているが、この表現によってアリストテレスが言いたかったのは、「可能的にあるものから思考によって現実的に生成すること、の規定」であると考えられる(24)。つまり、或るものが現実的に生成する（実際に生成が起こる）ための条件はどのようなものであるかが問題にされていると考えられるのである。

では実際に、右の引用に示されている条件の内容を見てみよう。そこには、「それが生成するとき」という条件が挙げられているが、この条件には、「それ〔生成するもの〕が意図され、外部にある何ものも〔その生成を〕妨げないことによって」という条件が付加されている。治療の場合で言うと、可能的に健康である身体から健康な身体が現実的に生成するのは、医者がその身体を健康にすることを意図し、治療を妨げる外的な障害がないことによって、健康な身体が生成する（健康な身体への生成が起こる）ときである。アリストテレスは、健康な身体が現実的に生成することを規定する際、生成の完了を語ろうとしているわけではないだろう。それは、「現実的に」が「生成する」にかかっていることから読み取ることが可能である。アリストテレスは、健康な身体が現実的に存在すると言っているのではなく、健康な身体の生成が現実的であると言っている。生成が現実的であるというのは、生成という運動が現実的に存在するということであり(25)、まさに健康な身体への生成が起こり、生成しているということである。このような現実的な生成の条件として、医者が意図し、外的な障害がないことによって、健康な身体への生成が起こるということが挙げられているのである。さらにアリストテレスは、健康にされる身体の内部にも、治療の妨げになる要素がないことを条件として挙げている。まとめると、或るものが

現実的に生成することの条件は、（1）技術者がその生成を意図し、外的な障害がないことによって、その生成が起こること、（2）可能的にしかじかであるもの（技術が行使される対象）の内部に障害がないことである。

このように、右の引用に示される条件は、或るものが現実的に生成することの条件として理解される。しかしアリストテレスはここで、現実的な生成に関心があるというよりはむしろ、生成の基体が「可能的にあるもの」と言われることに関心がある。そもそもΘ巻第七章の冒頭で言われていたように、この章の前半では、「それぞれのものがいつ可能的にあり、いつそうでないのか」ということが問題にされている。実際、アリストテレスは右の引用の後で、可能的に家であるものに言及し、それがそのように「可能的に」と言われることの条件を明らかにしている。その説明は以下のとおりである。

そして可能的に家であるものについても同様である。もしそれすなわち質料のうちにある何ものも〔それが〕家に成ることを妨げないなら、そして付け加えられたり、取り去られたり、変えられたりしなければならないところがないなら、それは可能的に家である。（Θ7, 1049a8-11）

この引用は、先の引用の後半部分で言われたこととの関係で述べられたものである。すなわち、或るものが現実的に生成することの二つの条件のうちの一つである（2）の条件との関係で述べられたものである。その条件、すなわち、可能的にしかじかであるものの内部に障害がないことは、先の引用では、当該の生成が現実的にあることの条件の一つとして挙げられていた。右の引用では、家が現実的に生成することの条件を明らかにするということは示されておらず、むしろ、この章で関心が向けられている可能的にあるものが、そのように「可能的に」と言われるのはどのような条件においてであるかが示されている。しかし、この「可能的に」と言われるための

条件は、先の引用における現実的な生成の条件の一つとの関係において理解されるのが、文脈に即した仕方であると考えられる。つまり、アリストテレスはここで、言葉に表してはいないが、家の生成が現実的であることの条件を念頭に置き、二つある条件のうちの一つだけを挙げていると考えられるのである。建築家が家を建築することを意図し、外的な障害がないことによって、家の建築が始まるという条件は省略されていて、可能的に家であるものの内部に障害がないという条件だけが取り上げられているのである。右の引用そのものは、可能的に家であるものがそのように「可能的に」と言われるための条件を示しているが、これは、内部に障害がなければ可能的に家であると言われることを示しているだけではない。ここで「可能的に」と言われていることは、家が現実的に生成することの条件を語る文脈の中で理解されなければならない。つまり、可能的に家であるものは、家の建築が始まる、あるいは始まっている限りにおいて存在すると理解されるべきなのである。可能的に家である質料は、その質料にそれ以上何かを付け加えたり、その質料から取り去ったり、その質料を変えたりする必要がないような質料であるが、そのような状態にとどまっていて、建築技術が行使されるのを待っているような質料ではない。あとは組み立てるだけというところまでととのえられた質料を、可能的に家であるものとみなすことは、間違いではないと思われるが、可能的にあるものを現実的な生成において理解するアリストテレスにとっては、十分にととのえられた質料に対して技術が行使されるとき、そして行使されているとき、可能的にあるものとしての質料が、「可能態」の最も厳密な用法において存在していると考えられるのである。このような可能的にあるものとしての質料はそのまま生成の産物の構成質料になるので、アリストテレスはその構成質料を躊躇なく「可能的にあるもの」と呼ぶのだと言うことができるだろう。

アリストテレスは次に、この技術的な生成に関する説明を自然的な生成に適用する。自然的な生成においては、技術者に相当するものはなく、また生成の基体のうちには自然が内在しているので、若干説明が異なってくる。

その説明は以下のとおりである。

それからまた、〔その生成の原理を〕もっているものそれ自身のうちに〔その生成の原理が〕ある限りの諸々のものについては、外部にある何ものも〔その生成を〕妨げないとき、それ〔それ自身のうちに生成の原理をもっているもの〕はそれ自身によってあるだろう〔それ自身によって現実的に生成する〕。例えば精子はまだ〔可能的に人間である〕のではないが（なぜならそれは他のもののうちに入って（ἐν ἄλλῳ <πεσεῖν>）変化しなければならないから）、それ自身の原理によってすでにそのようなもの〔胎児〕であるとき、それ〔胎児〕はすでに可能的にそれ〔人間〕である。（Θ7, 1049a13-16）

技術的な生成の場合と同様に、ここでも、或るものが現実的に生成することの条件が問題にされている。しかしその条件は、技術的な生成の場合と比べると、かなり削られていることがわかる。先の条件（1）では、技術者の意図があり外的な障害がないことによって生成が起こることが条件として示されていたが、自然的な生成の場合は、技術者の意図と、生成が起こることが削られ、外的な障害がないことだけになっている。また、先の条件（2）は、自然的な生成の場合、条件として挙げられていない。これらの条件の削除をどう理解するべきかは、右の引用の後半に示される具体例から明らかになる。それによると、すでに触れたことであるが、精子は可能的に人間であるのではなく、胎児が可能的に人間であることが示されている。家の生成における質料が可能的に家であると言われる際、その質料は、十分にととのえられており、家の現実的な生成において存在するのであった。精子が可能的に人間であると言われないということは、精子が、人間の生成のために十分にととのえられたものではないということである。右の引用から読み取ることができるように、精子は女性的要素のうちに入って、質

料の階層の一段上のものになる必要があるので、精子は十分にととのえられたものではないのである。この一段上のものとしてアリストテレスが考えたと思われるのが、胎児である。胎児は可能的に人間であることが認められているが、これは、胎児がさらに上の段階の質料に変化する必要がなく、その意味で十分にととのえられたものであることを示している。胎児から人間になる場合、家の質料を家に組み立てる建築家のような技術者は存在しない。胎児のうちには原理としての自然が内在しており、胎児はまさに自然に人間になるのである。このように具体例から考えると、人間が現実的に生成することの条件として、技術者の意図が必要ないことは明らかであり、右の引用でこの条件が削られていることは単なる省略ではないと理解できる。先の条件の（2）についてはどうだろうか。自然的な生成の場合、どの段階の質料であれば可能的にしかじかであると言えるかが問題にされ、質料の内部に障害がないことは問題にされていない。これもやはり、可能的にしかじかのものであると言われる一定の段階の質料のうちに自然が内在しているからであると考えられる。アリストテレスは、その質料のうちに自然があるということは障害がないということだと理解し、条件（2）を削除したのだと考えられる。

技術的な生成においては、生成が起こることが条件とされていたが、自然的な生成においては、可能的にあるものが、質料の階層における産物に最も近いものであり、質料の階層が上がっていく過程はすでに起こっているので、生成が起こることを条件として入れる必要はないと考えられる。人間の生成の場合、可能的に人間である胎児から人間へと現実的に生成する条件として、胎児から人間への生成が起こることを挙げる必要はないだろう。なぜならその胎児は、土から精子、精子から胎児へと生成する過程のうちにあるものであり、そのような胎児が存在するとき、人間への現実的な生成はすでに起こっているからである。この点は、技術的な生成の場合との違いとして注意されるべきである。木材から家が生成するという例においても、土から木が生成し、切り倒されて木材になり、木材から家が作られるという意味では、人間の生成の場合のように質料に階層があるように見える

かもしれない。しかし、土から木になり、切り倒されて木材になったときに、木材のうちには自然に家になるための自然という原理は存在していない。建築家がその技術を行使し、建築を始めない限り木材は木材のままであり、あるいは腐っていくのみである。これに対して、人間の生成の場合、土から精子、精子から胎児、胎児から人間という過程は、自然が内在しているために連続的に進行する。胎児の段階で、厳密な用法における「可能態」が適用されるという発想は、技術的な生成の場合と並行的であるが、その「可能態」が適用されるもののあり方は異なるのである。ところで、技術的な生成の場合、厳密な用法における「可能態」が適用される質料は、そのまま産物の構成質料になるということを先に述べた。この点についても、技術的な生成と自然的な生成とで明白な違いが見られる。可能的に家である木材はそのまま産物（家）の構成質料になるが、可能的に人間である胎児はそのまま産物（人間）の構成質料になるのではない。人間の構成質料は骨や肉などである。胎児という質料は未熟な状態のもので、それがより複雑化し成長増大することで人間になる。可能的に家である木材から生成した家は、木材でできたものと言われ、家の構成質料は木材であると言われるが、胎児から生成した人間は、胎児でできたものであるとか、人間の構成質料は胎児であるとは言われない。厳密な用法における「可能態」が適用される質料が、技術的な生成の場合では自然の欠如のゆえにそのまま構成質料としてとどまるのに対して、自然的な生成の場合では自然の内在のゆえにいわば変化し、そのまま構成質料になるのではないのである。

このようにアリストテレスは、「それぞれのものがいつ可能的にあり、いつそうでないのか」という問題に対して、最近の質料、質料の階層という考えを前提とした上で、技術的な生成と自然的な生成のそれぞれを取り上げて考察し、「可能態」の厳密な用法を明らかにした。しかしそれは同時に、技術的な生成と自然的な生成における可能的にあるものとしての質料が異なる性格のものであることを示すことでもあったのである。しかしこの違いについてアリストテレスは立ち入った考察を行わず、Θ巻第七章の後半で技術的な生成の場合を典型とし

て構成質料のあり方を属性との類比によって明らかにすることになる。やはり生物の質料の問題は、存在論、実体論とは別の個別的な学問領域に属することであるのだろう。アリストテレスは実体論の文脈にあるΘ巻第七章において、生物の質料が人工物の質料とは異なる性格のものであることを示唆しつつも、生物の質料の問題について立ち入った考察は行わないのである。

さて、以上によって、質料の階層という考えから「可能態」の厳密な用法が明らかになる道筋が明らかになったと思う。自然的な生成における生物の質料については問題があるが、これを除外して技術的な生成の場合で言えば、この「可能態」の厳密な用法のゆえに、個別的実体を構成する質料に「可能態」が適用されるのだということが理解されるだろう。最後に、『形而上学』Θ巻における「可能態―現実態」論の観点から「デュナミス」に関する論述の展開をまとめると、まず、「能力」としての「デュナミス」についてその用法が明らかにされ、次に、能力とその発揮としての活動を同一視するメガラ派の極端な現実主義的な見解が批判され、それによって一般的な意味での「可能性」の概念が明確にされた。そして「可能性」および「能力」についてさらに考察が行われた上で、「可能態―現実態」の対概念が例示によって明らかにされた。そしてΘ巻第七章に至って、H巻第四―五章で論じられた「質料」の問題を踏まえて「可能態」の厳密な用法が示されたのである。Θ巻における「可能態―現実態」論、あるいは中核諸巻における実体論において、「現実態」の概念が最も重要な概念であることは確かであるが、これの対概念である「可能態」も、「現実態」の理解のために不可欠であるという意味において、しかるべき考察の対象となるのである。

註

（1）筆者は以前、こうした問いに答えるために、拙稿「可能的にあるものとしての質料――アリストテレスの形而上学における生成と存

在――」東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室『論集』一八号、二〇〇〇年、一一四―一二六頁で、『自然学』Γ巻第一章における「運動」の定義と『形而上学』Θ巻第七章における「質料」と「可能態」の問題を取り上げ、「運動」の定義における「可能的にあるもの」の解釈によって、結合体の質料に「可能態」が適用されることの意味を明らかにしようと試みた。本稿では、アリストテレスの実体論における「質料」理解をより明確にするために、まず、質料そのものが考察の対象とされているH巻第四―五章を取り上げ、そこで示される質料の階層から「可能態」概念の用法について考察する。その上で、Θ巻第七章前半のテクストをより詳細に検討し、質料の階層と「可能態」の用法について考察する。これらの考察によって、結合体の質料に「可能態」が適用されることの意味も明らかになってくるだろう。

（2）これらの箇所のうち、Z巻第十章については、定義が問題になっている文脈の中で、質料も形相も結合体もοὐσίαであるとすればというように仮定の形で述べられており、H巻の箇所とは区別して考える必要がある。本稿で問題にするのは、H巻で言及されているοὐσίαである。Z巻第十章における定義論については、拙稿「アリストテレスの定義論における「質料」の問題」東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室『論集』一九号、二〇〇一年、一〇一―一一五頁で取り上げ、その際に、質料がοὐσίαと仮定されることの意味についても考察した。

（3）Z巻第三章における「質料」の問題については、拙稿「質料形相論と「身体」の概念」立正大学人文科学研究所『人文科学研究所年報』別冊、一七号、二〇〇九年、一〇九―一二〇頁の第一節で詳しく論じた。

（4）筆者は拙稿「類とエイドス――アリストテレスの実体論におけるイデア論批判の意義――」九州大学大学院人文科学研究院『哲学年報』第六九輯、二〇一〇年、四一―八二頁で、アリストテレスの実体論における「普遍」の問題について考察し、アリストテレスが個別的な形相と普遍的な形相の両方を認めていることについて、前者が後者にとって不可欠の基体であることを示した。基体としての形相については、このような解釈の可能性もあると筆者は考えている。

（5）Gillは、H巻第一章のおわりに見られる生成に関する論述（H1, 1042a32-b3）などを典拠にして、アリストテレスは実体的生成の基体としての質料を、現実的に或るこれ、すなわち個別的実体とみなしている、という解釈を提出している。Cf. M. L. Gill, *Aristotle on Substance: The Paradox of Unity*, Princeton University Press, Princeton, 1989, pp. 86-90. Gillは、生成物との関係で可能的にあるものと捉えられる質料と、実体的生成の基体としてそれ自体で特定のものとして存在する質料とを、文脈の違いによって区別しているようである。しかしアリストテレスは質料を、現実的にあるものではなく、可能的にあるものとみなしているのだから、現実的な個別的実体としての質料を認めることは問題であるように思われる。筆者は本節で、Gillの解釈とは異なる仕方で質料の実体性を説明する。

（6）ここで「質料的実体」がいわゆる質料を意味していることは明らかであり、一般的にそのように理解されている。アリストテレスは、

それに最近の質料があるところの粘液や胆汁を、自身の用法における実体とみなしているのではない。

(7) アリストテレスはこの引用の後で、「例えばもし脂っぽいものが甘いものから〔生成する〕としたら、粘液は脂っぽいものからも、甘いものからも〔生成する〕」(H4, 1044a21-22) と述べている。脂っぽいものが甘いものから生成することについては、Rossが指示しているとおり、『魂論』第二巻第十章 (422b12) と『感覚と感覚されるものについて』第四章 (442a17, 23) に説明がある。Cf. W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, II, Clarendon Press, Oxford, 1924, p. 235.『感覚と感覚されるものについて』第四章における論述 (442a12-25) によれば、味の両極として甘さと苦さがあり、諸々の味はそれら両極の味の混合によって生じる（両極の間にある）。これは、色の場合に白と黒が両極であるのと同様である。「脂っぽいもの〔脂っぽさ〕は甘いもの〔甘さ〕の味である (ὁ μὲν οὖν λιπαρὸς τοῦ γλυκέος ἐστὶ χυμός)」(442a17)、「脂っぽいものが甘いものに属する (τὸ λιπαρὸν τοῦ γλυκέος)」(442a23) と述べられている）ことから、脂っぽいものが甘いものから生成することがわかるだろう。

(8) 『動物誌』第一巻第一章 (*HA* I, 1, 487a5-6)、第三巻第二章 (III, 2, 511b9-10)、『動物発生論』第一巻第十八章(*GA* I, 18, 725a14-15) において、粘液が過剰物の例として挙げられている。過剰物については、『動物発生論』第一巻第十八章において、精液が有用な過剰物であることが示される際に詳しく説明されている。

(9) 粘液や胆汁の下位にある質料、すなわち脂っぽいものや苦いものは、さらに下位の質料を最近の質料としてもつように思われるが、これについては説明されていない。

(10) Rossは「同じ第一のもの」を「第一質料 (prime matter)」、「第一のものとしてのいくつかの同じもの」を「四元素」と説明している。Cf. Ross, 1924, p. 235. これに対してBurnyeat et al. は、第一質料が伝統的に理解されているとした場合、いくつかの第一質料というのはありえないとして、ここでの「同じ第一のもの」は水などの素材であると主張している。Cf. M. F. Burnyeat, et al.,*Notes on Books Eta and Theta of Aristotle's Metaphysics*, Study Aids in Philosophy, Oxford, 1984, pp. 31-32.

(11) アリストテレスは『生成消滅論』第二巻第一章において、「第一の諸物体が質料からである〔質料から生じる〕」という言い方をしており (*GC* II, 1, 329a28-29)、火や水などの単純な諸物体がいわゆる第一質料から生成すると考えているようにも見える。しかしその際アリストテレスは、第一の諸物体の質料が対立的性質から離れてありえないことを付け加えており、いかなる性質ももっていない第一質料から単純な諸物体が生成すると考えているわけではないことがわかる。アリストテレスは第一質料を対立的性質の担い手と考えているのであり、単純な諸物体が第一質料から生じると言っても、それは何らかの対立的性質を担った限りでの第一質料から生成するということだと考えられる。裸の基体としての第一質料から単純な諸物体が生成するわけではないのである。『生成消滅論』のこの箇所については、細かい点で解釈の相違があるが、第一質料が対立的性質を担った限りにおいて存在するという点では意見の相違はないよう

に思われる。Cf. H. H. Joachim, *Aristotle On Coming-to-be and Passing-away. A Revised Text with Introduction and Commentary*, Clarendon Press, Oxford, 1926, pp. 198-200, C. J. F. Williams, *Aristotle's De Generatione et Corruptione, Translated with Notes*, Clarendon Press, Oxford, 1982, pp. 154-156.

(12) この「それぞれのもの」は個別的実体ではなく、後の論述で問題にされている内容から考えて、対立的性質か、あるいは対立的性質をもつものを意味すると考えるべきだろう。対立的性質を意味していると考える場合、「それぞれのものの」における「の」は、「にとっての」とか「に対する」という意味になる。

(13) 第二のアポリアについては次節で見る。

(14) そこでは、マッサージによって熱が生じ、さらに熱の均衡が生じ、健康になる、という生成のプロセスに先立って、このプロセスをまず思考の上で遡ってマッサージという手段に至る思惟のプロセスがあることが示される（Z7, 1032b6-10）。

(15) Bostockはこれとは異なる説明を行っている。Cf. D. Bostock, *Aristotle Metaphysics Books Z and H, Translated with a Commentary*, Clarendon Press, Oxford, 1994, pp. 277-278. ここでの「状態ないし形相」を健康という属性的な形相とみなさないのは筆者と同じであるが、筆者と異なり、Bostockはその状態ないし形相を魂と解する。彼は、身体にとっての形相は魂であり生命であり、その生命は本性上健康であるから、身体はその生命によって健康である、というような説明を行っている。そしてこの説明では酒と酢の場合がうまく説明できないと言っている。しかし筆者が見るところでは、酒と酢の場合でうまく説明できないことが問題というよりも、そもそも、属性的生成が問題になっているところで魂ないし生命という実体的な形相を持ち出すことが問題であるように思われる。筆者が示している解釈は、まさに属性的生成が問題になっていることを説明するものであり、また酒と酢の場合についても並行的に説明できる解釈である。

(16) つまり、「酒」は二義的である。なお、酒が酢になる場合の「酢」については、酢という産物を考えるなら、水から一定の状態ないし形相がなくなったものと理解されるべきであり、酢という性質に変化すると考えるなら、酢は属性と理解されてよいだろう。こうした二義性はRossの注釈の中にも見られるが、それはもちろんアリストテレスがそのように二義的に用いているからである。具体的に挙げると、「酒がそれの特定の形相であるところの水」と言われる場合、「酒」は形相を意味しているが、酒はその質料（水）の正常な産物であり、酢は水の異常な産物であるとも説明されている。Cf. Ross, 1924, p. 236.

(17) 酒が酢になるような生成――消滅（腐敗）と言われる――は、付帯的な意味のものとされる（H5, 1044b36-1045a1）。「酒から酢になる」という言い方ができるからと言って、酒が酢の質料であることにはならないのである。ところで、死体の質料は生きている者ではないと言われる際、アリストテレスはその質料を具体的に示していないことが問題である。酢の質料は水であり、それは酒の質料で

もあるが、これと同様に考えて、死体の質料、生きている者の質料として身体を考えることにした。死体の質料として、生きている者の身体を考えるのはよいが、生きている者の質料として身体を挙げるのは問題であるかもしれない。というのも、生きている者が身体から生成すると言うことは問題であるように思われるからである。生きている者の質料としては、その者の身体へと形成されることになる、男性的要素（精子）と女性的要素（卵子）との結合体を考えるべきかもしれないが、この文脈では、酒と酢という対立的性質の基に共通の質料（水）があるのと同様に考えるのが自然であると思われるので、生きている者の質料としても身体を考えることにしておく。

(18) 「生成」と呼んだが、一定の状態ないし形相の欠如ないし消滅によるものであり、いわば腐敗であるから、「生成」よりは「消滅」——酒の消滅であるのは確かである——と呼ばれるべきだろう。前註の最初の部分を参照。

(19) 同様のことがH巻第四章にも示されている（H4, 1044a24-25）。

(20) この説明には問題があるが、註（17）に示したように考えて、あえて身体を質料とみなすことにする。

(21) Bostockがそのように説明している。Cf. Bostock, 1994, p. 278. ただし、異なる解釈も可能である。それは、酢が単純な物体としての水に戻るように、死体は単純な物体としての土にまで戻り、土から再び人間が生成すると考える解釈である。この場合、土（および水）は植物を養う栄養分であり、植物は動物を養う栄養分であり、これらの植物や人間以外の動物のいくつかの種類のものは人間を養う栄養分である。人間はそれらの栄養分を摂取して成長し、生殖に必要な要素を体内に形成するようになり、そして男性的要素と女性的要素との結合を経て子が生まれる。この説明からわかるように、子の生成を遡ると、究極的には土（および水）が存在しており、土は人間が消滅してそこへと戻るものであるから、このような見方において人間は再生していると解釈することが可能となる。もちろんこの場合も、一人の人間が死に、同じものが生き返るということは意味されていない。この解釈は、『動物発生論』、『動物部分論』、『生成消滅論』の論述をもとにGillによって提出されたものである。Cf. M. L. Gill, 'Aristotle on Matters of Life and Death', *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 4, 1989, pp. 197-199（およびGill前掲書pp. 128-129）。この解釈に問題があるとすれば、H巻第五章の当該箇所においてアリストテレスは、死体がその質料に戻るとは言っているが、究極的な質料にまで戻るとは言っていないことを挙げることができるだろう。この点を除けば、この解釈は、生命の円環を説明するという意味で優れた解釈であると言える。

(22) 生きていることと死んでいることを対立的性質とし、質料としての身体を基体とする属性的生成については、生きているという生命が魂という形相と同一視される点で問題があるように思われる。というのも、身体が生命ないし魂を獲得する生成は属性的生成ではなく実体的生成であるように見えるからである。本節のおわりでも述べるが、この問題に対しては、ここでは、一体の動物が生成すると

いう限られた視野――この場合は実体的生成として捉えざるをえない――ではなく、質料を基体とする円環という大きな視野において基体としての質料が存在していることが明らかにされており、その視野からすれば生命も属性として捉えられるのだと答えることができるのではないだろうか。

(23) Rossによれば、アリストテレスはここで、男性的要素と女性的要素が一緒になって子の質料を形成するとする一般的な見解を受け入れているかのように書いている。Cf. Ross, 1924, p. 255. ちなみに、『動物発生論』第一巻第十八章における精液（精子）に関する説明を見ると、精液は有用な過剰物として説明されており、質料とみなすこともできるようである。アリストテレスはこの説明に先立って、精液が質料であるか、形相（起動因）であるか、その両方であるか、という形で三つの可能性を提示している(*GA* I, 18, 724b5-6)。第一巻第二十一章に見られるように、アリストテレスの見解としては、精液は物質的なものであるが、そのうちに運動の原理としての形相を含んでいるということのようである。

(24) Rossは、或る質料が可能的にしかじかであると言われる諸条件をアリストテレスは規定しようとしていると説明している。Cf. Ross, 1924, p. 256. この説明も、アリストテレスの言う規定を、現実的に生成するものの規定とは解していない。アリストテレスの関心が可能的にあるものにあることに注意して、或る質料が可能的にしかじかであることの規定（条件）と解している。筆者は、アリストテレスはこの規定において、何かが現実的に生成することの条件を述べており、その中で或る質料が可能的にあることの条件も述べられているのだと解する。

(25) この「現実的に」に関してMakinは、『自然学』Γ巻第一章における「運動」の説明との関連を指摘している。Cf. S. Makin, *Aristotle Metaphysics Book Θ, Translated with an Introduction and Commentary*, Clarendon Press, Oxford, 2006, p. 163.

本稿は科学研究費補助金若手研究（B）による研究成果の一部である。